巣作り…神龍!?

rahotu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巣作り・・・神龍！？

【Ｎコード】
Ｎ４７６０Ｑ

【作者名】
ｒａｈｏｔｕ

【あらすじ】
ＦＦ５のあの裏ボスが巣作りの世界に降臨。
そしてそんな裏ボスに何故か憑依してしまった哀れな主人公の奇想天外な物語。

第一話（前書き）

書いてる小説の息抜きに投下。

第一話

遥か数千年もの昔、世界は竜によって支配されていた。

ヒトを上回る知性、天使や悪魔を超える力、何者にも犯されない不老長寿の存在として世界に君臨していた。

だが何時しか竜達は堕落し、その力を本来世界の安定に使われるべきものを自らが快楽のために浪費し、その結果世界は破壊と殺戮とが渦巻く混沌とした世界になってしまった。

この事態を受け敵対していた神と悪魔とは互いに手を結び天界、魔界、地上の総力を上げて竜達に戦いを挑んだ。

二千年もの長きに渡り続けられた戦いは、神によって創造された「竜殺し」の一族とヒトが振るう竜殺しの武具の活躍によって、竜達の敗北で終わった。

戦いが終わったとき竜はその数を十五頭まで減らし神によってその力と姿とを封印され非力な人間の姿に変えられてしまった。

世界の安定のため、数が減ってしまった竜達に人間や亜人を宛がいその数を増やさせたが、今度は人間によってその数を減らされることになる。

人間達は竜に対する恐怖と、また竜の体全てが同じ重さの金以上の価値があり、事実竜の各部位全てが貴重な魔法の材料となっていた。

そのため人間達は竜の体を求め竜殺しの武具を手に取りまた「竜殺

し」の一族も自らが名声のために進んで竜討伐に向かった。

神はこの事態を憂い、人間が過ぎた力を持たぬよう全ての竜殺しの武具を封印し、「竜殺し」の一族も天界と魔界によって根絶された。

これにより始めて世界は安定を取り戻し、竜達は減ってしまった一族の再興に務めた。

第二話（前書き）

続けて投稿。

第二話

竜には雄と雌がおりその比率は１：１６とされ、普通は竜の里でまとまって暮らしているが親通しが決めた許婚がおり、雄は成人すると里を出てヒトが近くに住む山に住居を構えそこに嫁を迎えるための準備をする。

この時、巣作りの準備が上手くいかず嫁の機嫌を損ねると最悪殺されてしまうこともあり雄竜にとって、巣作りは死活問題なのである。

又、竜は大変光るものや貴重なものを好みその住処には莫大な金銀財宝が隠されており雄竜は此れを近隣の住民達から奪う、または交渉によって貢納させる事によって集め嫁のご機嫌を取ったりする。

雌竜は雄竜とは比較にならないほどの力を誇りまた大変嫉妬深く独占欲も高いため気に入らないことがあると直ぐに制裁を加えたり、時に雄を殺してしまうことが多々ある。

そのため竜の雄雌の比率で大きく隔たりがあるのは雌が気に入らない雄を殺したりまた生来不老長寿を誇る竜は他の生物の例に漏れず生殖能力が低く純潔の種にいたっては千年に一匹生まれるかどうかである。

さて此処にある一組の竜の番がいた。

夫、妻、共に混血で最初は夫婦仲は上手く行っていたが夫の愛人を妻が嫉妬で殺してしまったために悪化し夫が配下の「竜殺し」の末

斎を使って妻を暗殺しようとするが失敗。
傷を負った妻が暴走。夫と血みどろの争いをし結局妻は竜殺しに受けた傷で死に、夫もまた妻によって首を食いちぎられて死んだ。
竜二匹の争いで巣は全滅。
争いによって山の地盤が沈下し、巣が崩壊。生き残った者も生き埋めは免れなかった。

そんな中、奇跡的に生き残ったものがいた。
彼女は偶々使いで魔界に帰っていたためその難を免れたが帰ってみると自分以外生きているものは見つからず途方にくれていたときにそれは起こった。
突然彼女が座っていた岩が崩れ彼女は地の奥深くに落ちてしまう。
そして気付いてみると目の前に一つの光り輝く大きな卵を見つけた。
最初はこの巣の奥様が産んだものかと思ったがこの百年間夫婦仲は最悪で洞窟の中で半ば別居中であった夫妻の間の子だとは思えない。
でも、巣を守っていたモンスター達の卵とも思えなかった。
その卵は何処か神聖な侵し難い雰囲気を持ち触れるだけで浄化されてしまうような神々しさも併せ持っていた。
彼女はこれを最初は売ろうかと考えたが持ち運ぶ手段もないし第一

ここからの脱出手段が無い。

穴は二十〜三十メートルもの深さがあり落ちたときに足を捻ってしまった為誰かの助け無しに動くことさえ間々ならない。

誰かが異変に気づいて来るかもしれないと淡い期待を抱くが、そもそも此処百年間夫婦仲が悪化したことを受け彼女が所属するギュンギュスカー商会との取引も殆ど無く彼女は本当に偶然貴重な魔法薬の補充のために使いに出されただけで誰かが異変に気づく事は皆無だった。

そんな絶望的な状況下で不思議と彼女は落ち着いていた。

目の前の卵が発する光で落ちた穴の中は明るくまたその光を見ていると不思議と心が安らいだ。

ふとした気持ちで卵に触れてみようと手を伸ばしたが幸いちょっと伸ばすだけで手が届いた。

最初は手を伸ばすたび光が強まり躊躇っていたが思い切って指先を「チョン」と触れてみた。

すると卵が今まで以上に光り輝き穴の中をまるで日の光の中のように照らした。

第三話（前書き）

続けて・・・

第三話

彼女は光り輝く中で唯呆然としていた。

彼女ファーティマはその中で不思議な体験をした。

そうまるでこの世の始まりから終わりまで。そしてとても幻想的ななんとも言葉に表せないような場所で一匹の龍とであった。

その竜は彼女が今まで見てきたどの龍よりも大きく力にあふれ全身から溢れんばかりの神々しいオーラを放ちしかしその目は絶えず遠くを見るようであり又全てのものを包む慈愛に溢れていた。

その龍がこちらを向くと声がした。

頭の中に直接響くその声は威厳に溢れまた不死鳥が謳うような滑らかさで話した。

「小さきものよ、我は遥か遠く次元の彼方からこの世界に降臨せし全ての龍の神である。」

龍は続ける。「そなたに折り入って頼みがある。我はこの世界に転生するも未だこの世界に干渉すること適わず、また転生せし我の分身は余りにも弱く塵芥の様な存在である。」

龍は其処で一旦言葉を止め、「頼みというのは我が分身のことである。我が分一人で生きること適わず、我を受け入れる器が育つまで

小さき者たちの手を借りねばならん。」

「我の精紳は次元を超え永遠なれど肉体は有限なり。今世の中で追い朽ち果てる定めにある。残った粒子で形作られたのがその卵である。」

そう言うと私の腕の中に先ほどの卵が抱えられていた。

「その卵を育てて欲しい小さきものよ。だが我が非力な分身を育てるは己が人生全てを犠牲ににするものである。そのため同等の代価も我が授けよう。」

「小さきものよ。哀れな我が分身の願いを引き受けてはくれまいか？」

龍はそう言って言葉を閉めた。

私は何がなんだか分からなかったが、この龍の願いは聞き届けなければならないと感じた。

何故かは分からないがそうしなければきっと大変事が起こるに違いないしそれに、この腕の中で暖かな光を放ちとこ時脈打つ卵を最早売る事はおろか手放す事さえ躊躇うほど私を引き付けるものがあった。

私は言った「一つ質問をよろしいでしょうか？」

「何だ？小さきものよ。」

「何故私なのですか？」

すると龍は、「全ての物事は全て因果の糸で結ばれている。其れを理解することは永遠ならざる者には理解しがたく又永遠なる者も因果の糸に縛られる存在である。そなたを選んだのではなくそなたと我とを結ぶ強い因果の必然であり当然の帰結である。」

私は多分半分も理解できなかったが少なくとも偶々や偶然の類でこうなった訳ではない様だ。

私は一度深呼吸をしもう一度腕の中の卵を見意を決していった。

「これがどの様な存在であれ私とどう関わるのであれ私は謹んで貴方様の願いを聞き届けます。私が生きている限り未来に渡り”その時”が来るまでこの子を守り育てることを誓います。」

そう言い切ると目の前の龍が突然光に包まれ消え始めた。

「感謝する小さきものよ。そなたが今後いかなる苦難があろうとも我が血族がそなたを守り守護するだろう。そして引き受けくれた代価として「生命の泉」をそなたに渡そう。」

そう言うと消えかかった龍のつめの先から一滴の水が落ちてきて私の差し出した手の中に握られた。

「其れは一滴でどの様な病や傷、死者をも復活させ望めばこの世の

全てが手に入るものである。そして”命の泉”と我の分身を育てる証をもう一つ授けよう。」

いった後に今度は龍の目から赤い涙のような宝石が落ちてきて私の胸の前で浮かんでいた。

「其れはドラゴン・ドロップなり。そなたが念ずれば我全ての時間、次元、宇宙を越えそなたの元に駆けつけるだろう。さらばだ小さきものよ。」

そういい終わると龍の姿は霞の如く消え、私は気づいたら穴の傍に立っており最初は夢かと思ったが私の腕の中にはもう光ってはいないがさっきの卵があり、左手には先細の青色のビンが握られていてポケットの中を見ていると赤色の宝石が入っていた。

第三話（後書き）

龍神のセリフはＦＳＳのＬＥＤ様を真似ましたｗｗ

第四話（前書き）

続きを投下。

第四話

あれから幾年も月日は流れた。

私は卵と共に旅に出た。

あのままあそこに留まっていれば近隣の人間達が襲撃して来るかもしれなかったからだ。

基本竜は人里の近くに住み其処から財宝を奪い集めている。

その為竜は厄災の証でもあるが逆に一攫千金を狙うチャンスでもある。

竜は巣の住処に莫大な財宝を隠し又貴重なアイテムが隠されていることもある。

さらに運よく竜の一部分でも手に入れれば其れだけで一族が三代続けて遊べる額が手に入る。

その為竜の住処に侵入するものは後を絶たないのだ。

無論侵入者撃退用にモンスターを雇ってはいるが、今の現状では生き残りは私一人であり、私には侵入者を撃退する力は無い。

それに今日の雨風を凌ぐ場所も無い。

本当に手詰まりだ。

此の儘ではあのお方との約束が果たせない。

それだけはいけないと思い何とか考えるが結局何も思い浮かばなかった。

そんな途方にくれているとヒトの気配を感じた。

それも一人二人ではなく大勢のヒトの気配だ。

私は慌てて卵を持って岩の影に隠れた。

人間が手に手に松明を持ってやってきた。

数は十人程で顔や様子は暗がりで分からなかったが気配で何事か話し合っているのが分かった。

十分位だろうか、人間達は引き返していった。

私は「フゥーっ」と息吐いて張り詰めた気を緩めた。

しかし事態は切迫していた。夜明けまでに早く此処を離れなければ朝になればまたあの人間たちが来るだろう。

それも今以上の人数で。最悪冒険者や軍隊も連れて来るかもしれない。

そうなったら一巻の終わりだ。私は着の身着のまま卵を持って夜の闇の中を駆け出していた・・・・。

其れからは流浪の生活を送った。あの方が言ったように卵を育てるには確かに人生を犠牲にする必要がある。

雨の日や風の日を何日も遮るものが無い野原で過ごした。

時に灼熱の太陽に焼かれ、ある時は吹き荒ぶ雪に襲われ。

ある時は嵐によってその身を引き裂かれそうになったこともある。

が其の度に卵が光りその光りに導かれるように何度も命を救われた。

そうやって何年も一人で世界を放浪した。

最初は魔界に帰ろうかと考えたが、そうすると必ず主人の事や卵の事を聞かれるし、其れに何よりギュンギュスカー商会が卵を見れば珍しい物好きの魔族のことだ、何だかんだ言って私から卵を奪い金庫か商品ケースに飾られるか、最悪研究対象として魔法薬の材料にされるかも知れない。

それを考えたら魔界など当然帰れるはずが無かった。

私は一人だった。だけれども少しも怖くは無かった。卵を抱いていると不思議と気が落ち着くし其れに私は決めたのだ。

どんなことがあろうと私はこのお方と共にあると。

”その時”が来るまでどの様な事があろうと守り育てていくと自分自身の意志で決めたのだ。

そんな決意を改めてしたある日。

突如として卵にひびが入り其処から太陽かと見紛う程の黄金の光りが溢れだした・・・。

第四話（後書き）

ちょっと此処でアンケートです？

竜の里に行く必要は在りですか？
あと主人公の嫁・・・・どんな竜が良いですかねぇ。
ツンデレ、ヤンデレ、クーデレ、デレツン？ツンツン、ドＳ（包丁つき）。

個人的にはヤ・・・いえいえ私は包丁よりも罵倒や蔑んだ目で見られる好きなだけでヤンデレなんかこれっぽちもあの包丁で内臓をメッタ刺しにされたいとか全然思っては居りません。

第五話（前書き）

前回のアンケートのご協力ありがとうございました。
結果からクーデレ２
　　ツンデレ１
　　他０
でヒロイン候補の一人はクーデレで決まりました。

第五話

卵から溢れ出す光。
まるで日の光の様に夜の暗闇を照らしていた。

卵にひびが入るたびに光は強くなりその輝きを増す。

私は急いで卵の元に駆け寄ろうとしたが指先が触れる刹那、卵にひときは大きなひびが入り卵が弾けた。

弾けた瞬間圧倒的な光の奔流に私は飲まれた。

腕で顔を隠しながらだけど私は眼だけは確りと卵があった所を見ていた。いや離せなかった。

そこで繰り広げられる美しい光景に。

最初は小さな渦が其処にはあって段々と無数の小さな粒になった。
そうした粒が集まり一つの塊を作る。

そうして出来た塊が合わさるごとに段々と形が作られていった。

まるで魂が互いに惹かれあい踊るようなその様はとても言葉では表現できるものではなかった。

命が生まれ惹かれあい大きな渦を作り其処から又新たな命が生まれる。

そうして出来た器に段々と輪郭がはっきりとして来た。

それは光の中で飛んだり跳ねたり駆けたりとまるで全身で自身の誕生や生命の奇跡を表すように。

そうして周りの光が渦となって器に注ぎ込まれた。

光が晴れると其処には一匹の生き物がいた。
大きさは中型犬くらいで二股に分かれた尾、羽根の様な鶏冠、六本指がある手、龍である事の証の尻尾の様に長い二本の角、そして小さな翼が既に備わっていた。
全身は純白の毛で覆われていて尻尾と角の先は朱色に染まっていた。

紛う事なきドラゴンの幼生がそこにはいた。
全身から溢れる気品と神々しさは正に神が創った芸術のようで私は唯呆然と立って目を奪われていた。

そしてこの世のどの生物より美しいそしてそれはこちらをじっと見つめていた。

しばらくすると幼生は一歩ずつゆったりと二本の足で確りと大地を踏締めながらこちらに歩いてきた。

一つ一つの所作がまるで芸術の様に完成されていて見ているだけでため息が出てしまうほどだった。

そうして幼生は私の前に立った。そこで始めて私はやっと頭が覚醒して急いで幼生の前に跪いた。

ずっと見ていたいという欲求に駆られたがそれを抑えて頭を垂れた。

幼生は近づいてきて私の顔に頬ずりをしてきた。
私は恐る恐る手を伸ばして幼生の顔を撫でた。撫でると幼生は気持ちよさそうに「キュゥゥゥゥ」と鳴いた。

そこで今までずっと張り詰めていた緊張の糸がほぐれ改めてこのお方は無垢な存在であると気付いた。

たしかに美しいがしかし何の力も威厳も感じずこの方があの神々しいまでに全てを超越した存在になるとはとても思えなかった。

そう思っていると私にじゃれ付いていた方が私に何か言って欲しそうな仕草をした。

最初何を言えばよいのか分からなかったがしばらくしてふと思い当たることがあった。

生まれたばかりの赤ん坊を抱いた母親はまず最初にかける言葉が名前を授けることだと。

つまりこの方は私に名前で呼んで欲しいのだ、しかし私にはこのお方の名が分かりようがなく其れに知らないからといって勝手に私如きが名を付けていい筈が無い。

そう思っていたが現状は名を付ける以外に解決策は無かった。
仕方ないので私は無い知恵を絞って必死に名前を考えることにした。

サタン、とかルシファー、とかベルゼばぶ、とかオーガとかピクルだとか変な名前しか浮かばずとてもこの方に名づけられるはずが無かった。

そうして悩むうちにふと昔のことを思い出していた。
そう幼い頃母に教えてもらった別の世界の話。その中で出てきた一

つの言葉。

「イスファハーン」と呟くと幼生は「キャッ、キャッ」と嬉しそうに飛び跳ねて喜んだ。

このとき私は言葉の意味をすっかり忘れていたので自分がどういった名をつけたのかまるで分からなかったがひとまずこのお方、イスファハーン様が喜んでくれる事が何よりも嬉しかった。

第五話（後書き）

な．．．なんか息抜きの枠を自分の中で越えてしまったような気がするので少し更新をやめます。

あとドラゴンの幼生は「すえぞう」と「楊貴」をあわせた感じになります。

原作に忠実で全く役には立ちませんが。（笑

第六話（前書き）

折角描いて投稿したのに消えてしまったから書き直して上げなおしたものです。

そのせいでかなり短いですので申し訳ございません。

こう一度会と者を又書き直すのはテンション的にきついので（汗

搾乳シーンを書いただけなのにデータが消えてしまうなんて。

第六話

あの後イスファハーン様ははしゃぎ疲れて私の膝を枕に眠ってしまわれました。

私も今日は色々とありすぎたので疲れていつの間にか眠ってしまいました。

そして目が覚めるとある重大な問題が起きました。

食料が無いのです。

女の一人旅で尚且つ魔族でもある私は、人里にも近づくわけにもいかず、こうしてなるべく人目につかない所を長い間旅をしていました。

食料といえば自然の恵みしかなくそれ以外は殆ど口にものをいれずに過ごしてきた。

だが今それが仇となった。

イスファハーン様がお腹がすいたと切なそうな眼で見ている。

時折、「キュウウゥゥゥゥン。」

と鳴いて、手で服の袖を引っ張たり、鼻で私の胸元をまさぐったりして私に訴えかけてくるのだ。

私も何か無いのかと辺りを見渡すが此処は生憎平原のど真ん中で食料になりそうなものはなく、ここを超えなければどうも食べ物にはあり付けそうも無かった。

それまでにイスファハーン様がもつかといえば・・・・。既に地面にへたり込んで動けそうも無い様子だった。

月明かりと焚き火の明かりがだけが私達を照らしていた。

そんな途方にくれているとき視界の端で何かが動く気配がした。

そちらを見ると数匹の獣が此方に近づいてきた。

私は急いでイスファハーン様を庇う様にして獣達の前に立った。

すると獣達の中から口に捕らえたばかりの獲物を咥えたものが出てきた。

そしてあろう事かその獲物をまるで差し出すようにして地面に置いて獣達は去っていった。

私は信じられない気持ちでそれを見ていた。
そして私が育てることになったこのお方がいかなる存在か改めて思い知らされた気持ちになった。

まあ、食料には此れから困らなそうなので、此れはよしとしよう。

第六話（後書き）

本当は思い余ってファーティマがイスファハーンに授乳する話があったのにあまりにも露骨なので結局書けずじまい。

こう歪曲に伝えるスキルをもっと磨かなければ。

第七話（前書き）

こ、今度こそ授乳シーンを書くぞ・・・。
絶対描くぞ、い・・・い、いか。絶対に描くからな！
だ、だから運営様、どうか削除しないで下さい。（涙

第七話

皆様、お久しぶりで御座います。

私ファーティマは絶賛料理中で御座います。

何時も何時もイスファハーン様が分けてくださる食べ物をやりくりしていますが、このままではいけないと日ごろの感謝の気持ちをこめて料理を作っております。

幸い此処は毒沼の近くで魔力や瘴気に溢れ、その為毒ガエルや毒蛇それと少量の硫黄が見つかったのでそれを材料に現在スープを作っています。

ああ、この芳しい近づくだけで鼻がひん曲がる臭い。
見るからに美味しそうな毒沼と同じ紫と黒の斑色のスープ。

あと近くで取ってきたトリカブトの根を刻んだ物を入れれば完成です。

そうして出来たスープをお皿によそい、スプーンをつけてお出ししした所、何故かイスファハーン様が寝てしまわれました。

よく見るとまるで天国に行ったように白目をなされ、瞳孔が開ききり口から泡を吹いていました。

このまま起こすのも可愛そうなので、先に一人で食べちゃいます。
起きてきたらイスファハーン様はきっとお腹がすいていらっしゃる筈なので、たっぷりとよそってさし上げようかと思います。

幸いスープはまだまだ沢山ありますので。

ーその後やっと三途の川から帰ってきたイスファハーンは、あのまま川を渡っていればと後悔することになるが、それはまた別のお話。
ー

あれからイスファハーン様に料理を作ってさし上げるのが私の日課になっています。

食材にはあまり困らないのですが問題は調味料のほうです。
あれからイスファハーン様はあまり瘴気や毒素の強いところには近づかないので、硫黄やドクツルタケが余り手に入らなくなっていま

す。

ですが、今日はなんと幸いなことに、珍味として知られるキョウチクトウが手に入りました。

季節によって若干味が変化しますがこの季節のキョウチクトウが正に食べ頃。

枝を粉にしたもの食べ物にふりかけると、昇天してしまう美味しさだとか。

今日は腕によりをかけて葉っぱと根を使た料理を食べていただきたいと思います。

私の思いが伝わったのかイスファハーン様は今日はいつもに較べてより一層遠い目をなされ何か悟りを開こうかとしています。

そうしてイスファハーンはもういろんな意味で頭を抱えていた。

だがその結果イスファハーンはこの世のありとあらゆる物が食べられる強靭な胃袋とある種の悟りの境地に達することになるが本人は余り嬉しそうではなかった。

そんなこんなでファーティマとイスファハーンは共に数年間を過ごしが，意外と役得があったりした。

ある時マンドラゴラを食べた結果、幻覚によってファーティマの豊満な胸をスイカだと思い、思いっきり堪能することができたのだ。

吸うたびに「あっ」とかわいらしい声を上げたり、ほんのちょっと舌でなめただけなのにもう顔まで真っ赤にして「イヤイヤ」したり、最後にサクランボを軽く噛んだだけで・・・。（まぁ、この先はご想像にお任せします。）

以後、食後にはファーティマの「ｏｐｐａｉ」を吸うのが食後のデザートになったりした。

そしてとある荒野で第二の転換期が訪れた。

第七話（後書き）

ファーティマはまだまだ成長するゾイ！！　エッチな犯罪はいけないと思います！！

何処とは言わないが。ただイスファハーンはラッキースケベではないゾイ。
子供だから仕方ない。そういう事にして下さい。

次回やっと主人公が出て来ます。転生者ですがまぁ問題ないでしょう。
ただ、搾乳のほうはあんまり露骨に書き過ぎたので以後控えることにします。

第八話（前書き）

やっと物語の主人公が出てきます。

長いような短いような、そんな感じです。

第八話

月下の荒涼とした荒野で私は焚き火の近くでイスファ様を抱いて毛布に包まっていた。

この荒野で彷徨い続け早四日。

私とイスファ様以外何者も居ない無人の荒野で私達は吹き荒ぶ嵐の中、互いに身を寄せ合い嵐がすぎるのを耐えていた。

そうそう、申し遅れましたが私ファーティマは何時までもイスファハーン様では長すぎるので、てかぶっちゃけ言い難い。

だから少りゃ・・・ 親しみを込めましてイスファ様とお呼びする事にいたしました。

決っっっっして、書くのがめんどいとか、覚えきれないとか、男の名前なんか覚えたくないとかでは御座いませんので誤解なきよう。

ええ、ですからイスファ様が今現在体が密着しているのをいい事に私の胸を弄くっていて、その仕返しのために明日の朝食は無しとか思いっきり背骨が折れて窒息死するくらい強く締め上げているわけえはありません。

これは風で寒いであろうイスファ様を暖めて差し上げるために少しきつめに抱いているのであって今現在私の腕から逃れようと暴れているのはこれは生命の危機だとか、殺されるとか、そういうものではなく嬉しがってじゃれついている”だけ”で御座います。

そうしていつの間にかイスファ様はピクりとも動かなくなり、ぐっすりと永眠(おねむり)なされました。

気がつくと私は暗い場所に居た。

なんでこんな場所に居るんだと最初は疑ったがすぐに思い出した。

私は死んだ。いや、正確には死んだはずだ。
よくある交通戦争に巻き込まれて乗っていたレンタカー共々押しつぶされた。

そうして目覚めてみると真っ暗な闇の中にいた。とするとここは俗にゆうあの世ではないのか?。

神様なんて本気で信じてはいないが、しかしこれは寂しすぎる。せめて俺の最後の妄想でもいいので巨乳な天使達に囲まれて空に上って逝きたかった。

ま、聖書的にはこれで合っているのかも知れない。ダンテにあるように大した罪を犯してない無神論者と異教徒が落される場所。

でも、たしかあそこは地獄の一階層だったから如何なのだろう?。
ま、どうでもいいか。

だが、なんか妙に生暖かいというか、乳臭いというか、この顔を圧迫する感じといい何か目の前にあるのかもしれない。

私は好奇心に釣られ目の前の物体を突いたり引っぱたりした。そうするとモジモジトくすぐったそうにそれが動いた。

私は、さらに積極的にもっと体全体でそれを感じてみたいと思った。普段ならこんな何も見えないところでする筈が無いことをしているのは、自分が死んだ？と思っていてあの世と思しき所で未知の存在に出くわしたのだ。

それが普段ではありえないほど私を積極的にさせていた。

私は最初と同じ様にそれに顔全体を埋め直に感じる脈打つ音と人肌の温もり、そして何処か懐かしいような包まれるような、まるで赤ん坊の頃に戻ったようだ。

そうやって顔を埋める間私の手は目の前の物体をさらに調べようと手のひら全体でまさぐっていた。

そうすると布のような物に手が触れた。そして私はそのまま下へ・・・。

いこうとして、そうするといきなり視界が開けまるで何か覆いが取り払われたよだ。

そして何が起こったのかと上を見ると満天の星空と顔を赤らめて怒ったような顔をした少女だった。

これが私とファーティマとの最初の出会いだった。
このとき私は思いもしなかっただろう、彼女と長い付き合いになると。そして自分に降りかかった重い運命を。

第八話（後書き）

あ、あれ。ファーティマのキャラってこんな感じだったけ？

こんなヒロイン、てありですかね？（候補として）

不評ならもとの重苦しくて、シリアスで、余裕が無くて、思いつめてて、もうどうしようもない状態の微ヤンデレファーティマに戻しますが。（笑

第九話（前書き）

転生要素はいらなかったかも（汗

でもそうすると話の展開が難しくなるので何とか頑張ります。

毎度のことなのですが今回もかなり時間が飛びます。ああ早くヒロインだしたいなぁ、スレンダー巨乳で眼鏡で長髪でクーデレでメイド服着て朝のご奉仕をしてくれる、そんな彼女が欲しい今日この頃です。

第九話

あの後私はどうなったか覚えていない。

ただ起きてみると何故か右頬がヒリヒリして赤く膨れ上がっていた。

しかも体が人間ではなくデッカイ鶏か頭の大きいペンギンみたいになっていて色々と戸惑ったりした。

その後私は朝食もそこそこに何故か目の前の少女の前で正座させられ説教を食らっている。

やれ調子に乗りすぎだとか、何処でそんなテクニックを覚えたのだとか、そんな風に育てた覚えはないとか、もう少し優しく扱ってだとか、この作品をＲ－１８にしたいのかとか、まあ彼女は昨日の私が行ったセクハラ行為に対して怒っていたのだ。

しかもこの体の持ち主はこれが初犯ではないようだ、どうやら食後とか眠っている最中にもセクハラ行為をし度々叱られているようだ。

まったく幾ら子供？とはいえ流石にこれはやり過ぎだと私も思った。だから私は勤めて反省した風にしていた。

そんな私の態度が良かったのか、彼女ファーティマは「もうこれっきりですよ。」と言って私の頭を撫でてくれた。

その後私はファーティマに連れられて行くあてもない長い長い荒野を旅立った。

幾日かすると私もこの体を思うように動かすことだ出来るようになった。流石に前のように話すことは出来なかったがそれでも一言ずつなら言葉を喋れる様になった。

まあ初めて話した言葉が「はらへった。」では様にならなかったが。

ファーティマもそんな間抜けな言葉に一瞬フリーズしたのか五秒間くらい動きが止まっていた。

でも、その後嬉しそうに笑顔を見せながら「はい。」と言ってくれた。まあ、その後の食事は地獄だったんだが。

ファーティマが嬉しさの余り僅かな食材を使って腕によりを掛けて作ってくれた料理なんだが、はっきり言って死んだほうがましだった。

見るからに毒々しい紫のスープに嗅ぐだけで昇天してしまう様な臭い。しかもそれをファーティマが皿にたっぷりとよそって笑顔でこちらに渡してくるのだ。

まあ、その後はこの体に若干の感謝と九割以上の後悔を経て何とか完食することが出来た。一口食べただけで地獄に叩き落されるようなスープを気絶しながらも食べきったこの体の主に心に中で黙祷を奉げたい。

―この後イスファハーン主導の下ファーティマの料理特訓が行われかろうじて食べられるような味付けになったが、試食と称して食べた料理の数々はイスファハーンが成果に較べて余りにも代償が大きかったと、後に述べている。―

そんなこんなでファーティマとイスファハーンの珍道中はその後世界中を放浪し時に泣き、時に笑い、様々な人々と触れ合い旅を続けた。

私はファーティマと共に旅に出て早十年が過ぎた。
最初は色々と戸惑うこともあったが今ではそれは良い思い出だ。それに旅先での出来事も私を退屈させなかった。

亜人種の村で世話になったりとか、追いはぎにあいそうになって特殊な能力に目覚めて逆に剥いだとか、人間の街に行って祭りに参加しただとか、王国に潜入して戴冠式を見たりだとか、戦場に行って

観戦しただとか、ハンターに狙われて返り討ちにしたとか、人間に変身出来るようになっただとか。

兎に角色んな事があった。それにファーティマも十年前と較べて色々と良い意味で変った、特に胸の大きさがここ十年で更に大きくなった。

うん、これも私の日々の弛まぬ努力と夜のイタズラの成果だ。まあ、代償は大きかったがな。

私が人間に変身出来るようになると一緒に寝てくれなくなって鶏？に戻って寝床の中に潜り込もうとするなら一週間ファーティマのお手製料理を食べさせられることになる。

一度やったが今でもあの時のことを思い出すと体が恐怖で震える。

そうそう、人間に変身した私の姿は銀髪黒目で身長も大体１８０ｃｍ位あって体付きも割としっかりしている。あ、それと私はどうやら龍だったらしいです。

人間に変身できるようになって色々とファーティマにこの世界の事を聞いたんですがどうやら私は一般的なほかの竜とは違いかなり特殊な存在のようです。

それ以外にもこの世界の成り立ちや人々のこと亜人や魔族の事等様々なことを教えてくれました。

どうやらこの世界はかなりファンタジックな世界のようです。魔法はあるしモンスターはいるしダンジョンもある。さらには魔王とか勇者とか天使や神様もいて思わずＤＱ、ＦＦ、ＳＡＧＡ、とのたまいそうになりましたが何とか思いとどまりました。

あとファーティマも人間ではなく正確には吸血鬼と人間とのハーフであるらしく魔法の扱いはそれほど上手くないが幼い時に父親からよく地上の話を聞いて育ったために同族の中では割と人間世界に詳しいようです。

そうそう、私は龍とあってどうやら魔法が使えるらしいのですがたいていの竜は生まれながらに莫大な魔力をその見に宿していて、呪文を覚えなくても適当に魔法の力が使えるのですが私はまあ、生まれが特殊なものですから中々魔力のコントロールが出来ずファーティマに簡単な魔法を教わって何とか出来る始末です。

ああ、出来れば魔法で空を飛びたいと思ったが、龍になる事さえできれば自由に空を飛びまわる事が出来るのですが生憎と私はまだそこまで出来そうもありません。

仕方ないので気長に成長を待つことにします・・・。

皆様お久しぶりでございます。私ファーティまでございます。
やっとの事でセリフを与えられたことを皆様に感謝します。さて、
私ファーティマはイスファ様と旅をして大体二十年以上が過ぎました。

その間実に色々な事がありました。
主にイスファハーン様が私の料理が余りにも美味しすぎて一口食べるたびに失神してしまったり、夜になるとこっそり私の服を脱がせて胸を吸ったり、その後私がたっぷりとＯＨＡＮＡＳＨＩしたりと色々とございました。

ああ、それとイスファハーン様がようやく喋れたり、人間に変身できるようになったり、それと何だか食べ物を呼ぶ以外にも別の能力があったりと大変使えるようになりました。

でもまだ龍には変身できないようで魔力の扱いが上手くできず私が少々の手ほどきをしてようやく幾つかの魔法を使えるようになりました、が毎回毎回ろくでもない事に使っています。

ご自分がかなりイケメンなのをいい事に私に前にも増して度々魔法を使ったセクハラをしてくるのは正直言って迷惑以外の何者でもあ

りません。

だからイケメンだからと全てが許される訳ではない事を今のうちにしっかりと教育していきたいと思います。

それ以外にもいきなりせまってきたりとか、体を密着させたりとか、ふとした拍子に笑顔を見せたりとか、子龍に戻って上目ずかいにこちらを見たりとか、本人がセクハラ以外に無意識にやっているので性質が悪いです、はっきり言って誘っているとしか思えません。

私我を忘れて何度押し倒そうと思ったことか。長年連れ添った私でもそうなのです、これが他の女性ではコロッとなってしまいます。よって世の女性を守るためにも私ファーティマが身を粉にしてイスファハーン様に女性との付き合い方を教育してその結果、見事な女垂らしになってしまいました。

ある時亜人の村にお世話になった時村の女の子が夜這いに来たのを撃退したとか、人間の町に行ってホイホイ女の子の後について行っちゃたりするので連れ戻したりとか、王国に行った際には王女から求婚されそうになったので恋文を偽装して何とか思い留ませたりしました。

私が一生懸命フラグやイベントをへし折ったりしているのですが本人は無自覚にフラグを乱立してある時など危うく結婚までしそうになりましたがその時は辛くも難を逃れる事が出来ました。

そのため最終手段の既成事実を作ろうとする女性を撃退するために私は日夜戦い続けたりそのために体を鍛えて独自の拳法を編出しとりとか本当に苦労が絶えませんでした。

私は日夜悩み続けましたがある時ふと思い浮かべました、そうだイスファ様は龍なのだから巣を持っても可笑しくはない。

なるべく人里から離れた辺境に巣を作ってそこに住めば女性の襲撃に悩まなくてすむ。

思い立ったが吉日と、私は早速イスファ様にこのことを提案しに行きます。別に二人だけの愛の巣とか独占とかそういうものではなく純粋にイスファ様のことを思ってのことですので、勘違いがないようにおねがいします。

第九話（後書き）

ファ、ファーティマが壊れた。

あれ、最初はこんなキャラではなかったはずだが。あれか、あれなのか。ファイブスターのすえぞうとソープのやり取りを見た後に書いたからこんなになってしまったんだ。

まあ、次回くらいにやっとファイブスターを離れてＦＦに移れるので何とかなると思います。

第十話（前書き）

少しオリジナルが入ります。

第十話

魔界のとある場所の城の暗い執務室でロウソクの火に揺られながら二つの影が映し出されていた。

一つの影は人の姿にコウモリの様な羽を持ち、もう一つの影は羽こそないものの特徴的な尖った耳を影に映し出していた。

「で、その後十三号の方はどうなった。大佐？」翼を持った男が血のように赤い液体が入ったワイングラスを揺らしながら向かいのソファーに座る大佐と呼ばれた女性に言った。

「はっ、現在捜索隊を派遣し目下調査中でありますが何分相手は大陸中を絶えず移動し行方が掴めません。さらに地上のほうでは近々大規模な戦乱が起こる模様で下手に魔族が動けない状態にあります。」そう言って大佐と呼ばれた女性は軍人口調で報告した。

「ふんぅ、大佐君は少し誤解しているようだ。私が聞いているのは現在の状況ではなく十三号の方で何か変化はあったか、と聞いているのだよ。」そういって男は猫なで声で大佐に言いながら薄明かりに照らされた中ワインを一口煽った。

この如何にも貴族的話し方をする男こそ魔界有数の商会であるギュンギュスカー商会現会長であり魔族だけでなくドラゴンさえ商売相

手に選び成功しているこの男がいかに優秀な経営者であるか見て取れる。

そして経営者としてだけではなく自身も吸血鬼として名を馳せる男。ギュンカー・ギュンスターはとある問題でこうして目の前の女性を呼び出し報告を聞いていた。

「いいかね、事は重大かつ火急を要する。そのために君には大佐の階級でありながら本社に自由に出入りを許しているしさらに階級以上の権限と資金と部隊も与えている。」男は一息に述べると、「ふぅっ」と息を吐いてその身を高級な革張りの椅子に預けた。

「全く、君には期待しているんだよ？これ以上私を失望させないでくれ。」男はそう言うとやれやれといった感じで額に手を当てながら首を横に振った。

「申し訳ありませんギュンカー会長。ですがいま少しお時間を、対象は最後に観測された魔力反応以外十年以上にも渡りこちらの捜索を逃れてきたのはまさかまぐれではありますまい。」そう言うとギュンカーは少し興味を持ったのか続きを促した。

「いかに地上とはいえ我々魔族のしかも皆腕利きのもの達が高々魔族の少女一人を探すなど造作もありません。しかも対象は一定の期

間で膨大な魔力を発生させる物を持っています。しかし最後の反応以外実際問題ここ十年間対象を捕らえることはおろかその足取りもつかめていません。恐らく彼女の背後には何らかの協力者がいるのではないかと愚考します。」大佐と呼ばれた女性はそうきっぱり言い放つと相手の出方を伺った。

「つまり君はこの秘密を知るものが我々以外にもいてそして我々の邪魔をしていると、そう言いたいんだね。しかしい「魔王、天使、他の商会」！？」

「可能性をあげるだけ無駄です。事実この秘密を知るのは我々以外にはありえません。もし万が一この秘密が漏れようものならもっと積極的に動いてもおかしくはありません、しかし今現在そのような情報は入っておらずまた対象と接触した形跡もありません。よしんばそうだったとしても我々が気づかないはずがありません。」

「ふん、では一体誰が我々の邪魔をしているのかね？」男はもう一度ワインを煽りながら尋ねた。

「我々以上の規模を持つ組織化、或いは内部のものかもしれません。」

「つまり君は我々の中に裏切り者がいると、そういいたいんだね。」男が口を歪めながら答えを聞くと女性は、

「はいっ」ときっぱりと答えた。

「はぁ、分かった。内部のほうは私が洗っておこう、君は引き続き十三号の捜索および十三号がもっていると思われるアイテムの詳細について調べたまえ。」そういってギュンカーはもう用はないとばかりにワインの残りを一気に煽った。

大佐と呼ばれた女性はソファーから立ち上がり一礼して執務室を出ようとしたがその後ろ姿にもう一度ギュンカーが声を掛けた。

「次は良い報告を期待しているよ。」

そう言われた後女性は返事もせずに部屋を出た。

そうして部屋を出た後長い本社の廊下を歩きながら彼女は先ほどの会話を思い出しながら次の部下への指示を考えていた。

おそらく次は無い。今度の捜索で対象を発見できなければ私の命は無い、いやあの好色な会長のことだ散々私を遊び倒した後に愛玩具として売られるか若しくは新種のモンスターの苗床にされるのが落ちだろう。

絶対にそうなるものか！私はこんなところで終われない。家族のためにもそして何よりも私の野望のためにも。

彼女はそう考えると心なしか若干廊下を歩くのを急ぎながら部隊へと戻っていった。

そうすると後ろから本社つきメイドがこちらに声を掛けてきた。

「アシェラン大佐お待ちを。部隊のほうから重大な書類を預かっています。」そういうとメイドは手に持っていた厳重に封をされていた厚い書類をこちらに手渡した。

実際こういった書類はメイド如きに渡すものではないが緊急の要だったのだろう、仕方なく厳重に封をしてこのメイドに渡したのだろう。

メイドのほうも分かっているのか私に書類を渡した後一礼してその場を離れた。

私は報告書をその場で読むようなことはせず一旦自分の部屋に戻ってから書類に目を通すことにした。

部屋に戻ってから私は厳重に封をされた書類を解きながら一つ一つ

書類に目を通していく、そしてとある文章に目が釘付けになった。

{対象と極めて近い魔力反応を検地、一定の場所に留まっている模様。このは・・・}

「ふふふっ」私はこみ上げてくる笑いを手で押さえてはいるが堪え切れずにいた。

「まったく悪戯な悪魔は今日は私の味方らしい。」私はそう言うとすぐに通信魔法を部隊に繋ぎ全部隊に命令を下した。

そしてその後私自らも現場に立つため服を着替え道具を揃えて部隊と合流するために準備を行った。

「ようやく私にも運が回ってきた。まったく、人生最高の日は最悪の日と同じとは傑作だな。」私は準備の間も笑いをこらえきれる事が出来ず口を歪めながら準備を行った。

「ふふふっ、あはははははは、あッはははははははははははははあああああああああああああああああああああああああああああああああああ。」

第十話（後書き）

役者がそろいつつありますねえ。

まったく野望を持った人を書くのは楽しいです（笑

第十一話（前書き）

久しぶりに投稿を再開します。

第十一話

突然で申し訳ないが私ことイスファハーンは現在土木工事を行っている。

なんでそんな事をしなければならないのかというと、ファーティマが突然巣を作りましょうと言うのだ。

別に今までのように気ままに旅をしてもいいのだが何でも龍は成人すると巣を作りそこに嫁を迎えるらしい。

だからいい加減私も成長したので巣を作ってもいい年頃だというわけだ。

しかし、私は恥ずかしいことに未だに龍になる事が出来ない。いや努力はしているがこう生まれながらに分かるのと生まれてから教わるのでは大きく違う。

さらに私はこの体の主を生み出した両親という存在を知らない。幼い時の姿からまさか人間ではないと思うがしかし私には見本となる存在がいない。

ファーティマも魔族ではあるが竜族ではなく変身の仕方もこう曖昧

で象徴的過ぎて要領を得ない。

そういうわけで変身が出来るまで気長に待つという方向だったのだがファーティマが突然考えを改めて巣を先に作ることになった。

で、現在私は北にある人里離れた険しい山脈の一際高い山を削り棲家となる洞窟を掘っていった。

私は最初は素手でどうやって掘るのかと思ったがどうも竜は人間の姿でいる時は普通人間並みの力しか発揮できないのだが長く生きたものや力のある竜は人間の姿でも竜としての力を振るう事が出来る。

どうも私は後者のタイプらしく人間の姿でもある程度龍としての力と最近コントロールができるようになった魔力のおかげで素手でもまるで砂を掴むように岩石を掘り進む事が出来た。

まあ、流石に素手では効率が悪いのでここに来るまでに土木用の道具を一揃い買っていたのでそれを使って何とかなっている。

最初は有り余る力のせいで道具のほうが先に壊れてしまったが最近では道具自身に魔力を込め若干疲労度は上がったがそれ以上に穴を掘るのがよりスムーズになった。

「ジャンケン、グー」とやったら危うく山が崩れそうになったので以後自重した。

ただ、時々「冨樫仕事しろ！！」と突っ込みたくなるのは気のせいではないだろうか？。

灰色にくずんだ空の下、北の海で冷やされた海流が吹き荒ぶ風に乗り荒波が山の峰峰に当たり反響し轟音をかき鳴らしていた。

山肌は岩が所々突き出し空と同じ様な灰色の地肌を晒していた。そしてそんな極寒の極地にある山の一つに数人の人影が立っていた。

その全員が黒衣を纏いある一点を見つめていた。

「あれがそうか。」黒衣のフードを外し甲高い女の声が強風にあおられながらも一つの山を指して響いた。

「はい、あの一番高い山の中腹に十年前と同じ魔力反応を検知しました。」そういって配下の一人が答えた。

彼らは二十年以上もある物を探して大陸中を探し回りそしてようやくそれとおぼしき物が見付かったのだ。

「しかし幸いでした。この地方の街で男と女の二人組みが大量に工事道具を買って北の山に向かったとの報告があったのですが、この時期は北の海流のせいで
大地が凍りとてもではありませんが炭鉱夫など出来ようもありません。」部下達の中で一番巨躯の男が腹の底から轟く様な声で言った。

「不審に思い使い魔を放ちましたが思うように手こずり中々発見できましぇんでしたがこの付近を探索していた一匹が膨大な魔力反応を検知いたしましたのですぐさま分析にかかって十年前と同じものと断定しました。」男達の中で一番小柄な人物が長い鼻をフードから出しながらしわがれた声で言った。

「本来ならば会長に報告し指示を仰ぎたいところだが何分我々には時間が足りない。」女がそうきっぱりと言いながら何か考えるように顎に手を当てた。

「今この機会を逃せば当分この大地は雪に閉ざされ如何に我ら魔族といえどそのような極寒の大地では思うように動けますまい。」中肉中背の男がてに持つ杖を支えにしながら言った。

「では、いかがなさるおつもりでぇ。」

「春の雪解けまで半年、それまでに何らかの成果を上げなければ我々の未来は無い・・・。仕方ない不本意だが我々だけで対象の調査及び可能ならば奪取を行う。」女が振り返って部下達に不満があるかと問うた。

「分かりました。我々一同隊長のの意見に賛成です」中肉中背の男が胸に手を当てて恭しく頭を下げた。

そういうと彼らは各々使い魔に乗り颯爽と山脈を翔けていった。

「う～ん何だか今日は朝から変な感じだなぁ。」私はそう呟きながら穴を掘るツルハシの手を止め滴る汗をぬぐいながらふと後ろを振り返って自分が掘った洞窟全体を見渡した。

どの位掘ったのだろうか、多分山の真ん中くらいまで掘っただろう。ここに来るのに一ヶ月、ここを見つけ巣穴を掘るのに最初は悪戦苦闘したが慣れてみると僅か二ヶ月程で五十メートルほどの大きさの穴を掘れ今現在は山の中央付近から下の方にシャフトのような穴を掘っている。

食料については俺の能力のおかげで腹が減ったと思えば直ぐに海や山の麓から獣や鳥達が食料を運んできてくれる。

それに掘ってる途中で出る貴金属や宝石、鉱石等を街で売って食糧を買ってくるので幸い味にも不便はしなかった。

まあそれでも近くの町からここまで遠いのだが何故かテレポストーンというものを掘り当てた。

この石は、テレポスフィア、テレポストーンとにに分かれていて一度触れたことのあるテレポスフィアにはテレポストーンを使って瞬時に移動ができる優れものらしい。

しかしこの技術は絶えて久しいのだがこの地方はそれほど開発が進んでいないのか街にも古いテレポスフィアがあり掘り当てたテレポスフィアと連動して瞬時に移動が可能になっているのだ。

まあ最初は瞬間移動先で驚かれたりしたがそこはファーティマと私の不思議パワーで何とか誤魔化していた。

で私たちは洞窟暮らしとは思えないほど快適な生活を送っていた。俺が発掘した様々なスフィアや魔石を使って薪や灯りの代わりにしたり岩石や鉱石を使って椅子やテーブルも出来た。

最近では地下水脈も掘り当て更に掘り進んで温泉を発見する事が今の目標だ。

そんな悠々自適な隠遁生活を送っていると何やら洞窟の入り口のほうで本来この場所にはいないはずの人それも複数人の気配がした。

第十一話（後書き）

やっと更新できました。

まあこの後は何故魔族が主人公達を狙うのか分かります。

では次回お会いする事があるまで。

第十二話（前書き）

ネタが今回で切れました。テンションの問題でグダグダ感が（汗

ああ、早くファイブスター、連載再会されないかなぁ。

ファティマとかファティマとかメガエラとかエストちゃんとかデコ助とかに早く合いたいなあ。

第十二話

私達は使い魔に乗りながら山脈に轟く風にあおられながらも、何とか目的の山の麓までたどり着いた。

下から見上げると、山の頂上が雲に隠れ、この山がいかに大きいか一目で分かる。

山肌は灰色に黒ずみ、所々先の尖った砂利や岩がとび出し、何者をも拒むその威容は正に圧巻の一言であった。

私達は直ぐに上るような愚を起こさず、周到な準備をしてから山を登り始めた。

吐く息が全て白く染まり、唇が寒さで変色しているのが分かった。

木の根一つ無い山肌を、すこしでも気を抜けば山に吹く強風に煽られ、真っ逆さまに地面に叩きつけられ、

さらに、手に掴む岩肌は、何重にも防備した手袋を貫き、手を血で真っ赤に染め、手袋から滴り落ちる血が、服の裾を通って、私の体にまとわりついた。

服を突き刺すような強風、剣山のような岩肌、登ろうとする者全てを切り刻み、山肌に叩きつけようとするその姿は、山の姿をした龍を思わせた。

しかし、何とか山の中腹まで登りきり、部下と共にやっと一息つけた。

途中で、明らかに人工で作られた溝を見つけなければ、恐らくここまでたどり着けなかっただろう。

私達は、息を整え、体に鞭を打ちながらも、問題の魔力反応を探した。

暫くして部下の一人が山に穿たれた穴を見つけたといった。

その穴はここ最近出来たものらしく、人一人がやっと通れる程の大きさの洞窟から、例の魔力反応も僅かながらこの穴の奥から出ていた。

如何するか一瞬迷ったが、私は体が大きすぎるせいで穴を通れない部下を見張りに置き、後の者をつれて慎重に洞窟に潜っていった。

穴は深く、急な斜面こそ無いものの狭い通路を歩きながらも、魔力反応は奥に行くにつれ、高まっていった。

それに合われて、私も心なしか心の内が高まっていった、後もう少し、後もう少しで、目的を達成できる。

そうすれば、私は・・・・・。

心の声をグッと堪えながらも、私は興奮と緊張で汗をかき服を湿らせていた。

魔法により灯された松明の揺らめきが、私の心を象徴していた。

先頭を行くものが「しっ」といって松明の火を消した。

一瞬光が消え暗闇に戻るが、しかし、よく見ると出口付近から薄っすらと光が漏れていた。

私達は慎重に這う様にしながら出口を目指した。

そして、ゆっくりと穴から抜け出すと、暗闇に慣れた目が突然日の光に当てられたように眩み、何とか立て直しながらも巨大な広間のようなものに出た。

広間に出てまず気づいたのは、巨大な洞窟の中なのに光に溢れていることだ、そして広間を見回すと、その正体に気づいた。

高さ五十メートル以上にもなる広大な空間の天井に、巨大な結晶がはめ込まれていた。

その結晶は今まで見たどんな宝石よりも大きく、その輝きは太陽の光を思わせた、しかし、本物の太陽なら今頃私の体は灰となっているであろう。

だが、この結晶の光には、長年吸血鬼を呪い続けながらも、その実羨望の的であった光は柔らかく私たちを包んでくれるようだった。

その何処か「ホッ」とする光に照らされて、私は一瞬自分の任務を忘れそうになるが、直ぐに頭を切り替え部下に指示を出しながらゆっくりと広間の中央に進んでいった。

進んでいくと、巨大な広間の中央に人が立っているのが見えた。

恐らく、この洞窟の主だろうか？この男が私たちが捜し求めるものを持っているかどうか、穏便に事が運べばそれでいいが・・・・。

私は今、広場の中央に陣取り、招かれざる客を迎えている。相手の人数は四人、体格から見て一人は女性でだろう。

何が目的化は知らないが、相手の出方しだいでは、紅茶を出す準備も、手袋を投げつける用意もしている。

念のためファーティマは奥に下がらせ、私は一人で彼女らと対峙した。

銀色の髪と、蒼い目を持つ男が此方の様子を伺っていた。

まだ、何処か抜けてそうな顔立ちをしているが素材は悪くない、いや、中々の逸材だろう。

私はそう思いながらも、表情にはおくびにも出さず男の顔を見た。

しかし、部下には何時でも飛び出せる用意をさせ、私自身もローブの下に隠れた剣の柄に手を当てていた。

何故なら、この男から探知機を使わなくても微弱ながら例の魔力を感じる事が出来たのだ。

私は極めて丁寧な口調で挨拶した。

「突然の訪問、失礼しました。私はギュンギュスカー商会大佐、アシェラン・サングウィスと申します。」

「イスファハーンだ。」男はぶっきら棒に答えた。

「私達は貴方方に危害を加えるつもりはありません。ただ、あるものを求めてここにたどり着いたしだいです。」

「ある物とは？」男が油断無くこちらを見ながら尋ねてきた。

「とある貴重なアイテム、またはそれに類するものです。既に此方の調査でここにあるのは分かっています。ですのでそれを渡していただくか、或いは協力して頂きたいのです。」

「行き成りそんなことを言われて『はい、そうですか』といえるはずが無い。」

「そもそも、私はそんなものは知らないし、渡すことも協力する言われも無い。」

その瞬間、私たちの間で緊張感がほとばしり、後ろに控える部下たちが各々獲物に手をかけた。

「では、我々に如何しろと？失礼ですが余りギュンギュスカー商会を舐めない方が宜しいですよ。商会にかかれば今直ぐにでもここをどうにでも出来ますよ。」

「脅すのか。」男が明らかに怒気をはらみながら言った。

「いえ、ただ我々は穏便に事を運びたいだけです。そうすれば双方共に利益になりますよ。」

「もしご協力いただければ、我が商会と優先的に専属契約を結ぶことも出来ますよ。幸いここをこれだけ開発できる力とあの結晶のような良質な魔石が出るここは他の商会も涎を垂らす代物です。」

「そんな餌に乗るか。今直ぐここから出て行け。」

これだけ言っても分からないようだ。少しアプローチを変えよう。

「正直に言いましょう。余り私たちをなめるなよ。」

全身に魔力を込めながら語気を強め、ゆっくりとした動作で相手にも分かる様に剣の柄を握った。

さっきまでの丁寧な態度が嘘のように消え、そこには相手を狙う狩人がいた。

「さっさと渡すか、痛い目を見るか、どちらかを選ぶといい。」

そう言うや否や神速の抜刀で剣を抜き放ち相手の喉元に剣の先を押し付けた。

後ろに控えていた部下達も私の動きに合わせ、相手を取り囲むように展開し、各々獲物を手に何時でも仕留められる様にジリジリと相手を追い詰めていった。

第十二話（後書き）

次のうちあなたが好きなのは誰ですか？
アトロポス、ティスホーン、クローソー、メガエラ、エスト、静、

ダメだ、早く、早く、ファイブスターの連載再開を！！
でなきゃ、この物語が完成しない。
ああ、ファティマの脚をスンスンしてむしゃぶりつきたい。

感想で商会が竜に喧嘩売るのはどうか・・・。と書いていたので、
直ぐに修正させていただきました。

第十三話

ジリジリと迫ってくる相手に対して、私はずっと視線を動かさずに目の前の女に集中していた。

互いに互いが相手の瞳を覗き込み、その意図を探ろとずっとにらみ合いが続いていた。

と、ここで私は酷く自分が冷静な思考をしていることに気が付いた。

恐らくは龍としての力が、目の前の状況に対してなんら危機感を持つ必要がないのを教えているのだろう。

それに目の前に対峙してずっと相手の瞳を覗き込んでいると、自然と相手の考えや意図が手に取るように私に伝わってきた。

今までも麓の人間相手に意図せずに相手の考えが分かってその度に助かった居たのを思い出す。

是を利用すれば今の状況を何とかできるかもしれない。

私は機を窺う為に、そのまま相手とのにらみ合いを続けていた。

アシェラン・サングウィスは内心で焦っていた。

と、云うのも何故か目の前の男に対して短絡的な行動を取ってしまった自分に驚き、無論其れは表情には億尾にも出さないがしかし自らが取った行動が状況を困難にしていることを感じた。

―アシェラン大佐、いかがいたします。こやつ先程から我等になんら注意を払いませんしそれほどの使い手にも見えません。ここは我等に任せアシェラン様は魔力の探索へと向かっては・・・・。―

頭の中に鳴り響く声が、それが部下たちが発した念話である事は直に分かった。

いつもはこんな状況では念話といえども相手に気取られる可能性があるので彼らは使わないのが常であった。

しかし、ながら目の前の相手からは何の力も魔力も闘気ま感じず又索敵魔法でも罠が仕掛けられてはいなかった。

―いや、もう少し待て。ここまでされて唯黙っている筈がない。相

手の出方を見るまでもう少し待て。―

先程から睨み合いばかり続けていて、部下たちもじれったいのだろう。しかしアシェランは自らの心の内の動揺に混乱しそれを上手く説明する術を持たない彼女は唯無為に時間を浪費するしかなかったのだ。

第十四話（前書き）

今回の話は、まあテンプレどうりというか王道というかなんというか・・・・。

第十四話

遅い・・・・。

ファーティマは洞窟の奥に作られた部屋の中でじっとイスファハーンの帰りを待っていた。

何者かがこの山脈に来たことを、イスファハーンその力で察知してた。

が、まさか自分達が狙いとは考えずに、イスファハーンは捨て置いていた。

その侵入者が自分達の家に入ってきたというので、イスファハーンは一人ファーティマを残し、広間で侵入者を迎え撃っていた。

確かに、イスファハーン様は、最近力の使い方を覚え始めお強くなりました。

でも、でも、それでも本来の龍の力に比べればなんと矮小で、小さな力でしょう。

本来あのお方がもつ力はこんなものではない筈なのに・・・。

ファーティマは言い知れぬ不安と、恐怖と何も出来ないでいる自分へのもどかしさとでいっぱいであった。

そして、奥の広間から感じた膨大な魔力に彼女は半ば無意識に命の水を片手に部屋を飛び出していた。

さて、どうするか。

私は現状の不利を悟っていた。先程目の前の女の瞳を覗き込んでいれば何か妙案が浮かぶかと思ってはいたが、一向に浮かばずジリジリと追い詰められていくばかりだ。

ファーティマがいう龍の力を発揮できればこの世で適う者はいないというが、いまだ若輩の私の身ではそれも遠そうだ。

私は表情を変えないように勤めながら、どうするかと悩んでいると・・・・。

ドンッ！！

と、音がするほどの魔力が目の前の女から溢れ、先程と違いその瞳は獲物を見定める猟師のそれであった。

「さて、下手な時間稼ぎは此処までにしましょう。これが最後のチャンスです、我々に協力するか否か、はっきりさせましょう。」

最早女の目からは先程の迷いは感じなかった。

あるのは鋼のように硬い意思と、周囲の空気を怯えさせるほどの魔力の奔流だけであった。

今の私の力では逆立ちしたって勝てないほどの魔力を帯びる彼女を前に、私は覚悟を決めざる終えなかった。

と、その時広間の向こうから人影が現われたのだ。

「イスファハーンさま！！」

此処まで走ってきたのか、汗を切らし、目を潤ませたファーティマはあらん限りの声を出して、愛しく敬愛してやまない人の名前を叫ぶ。

その声に反応してか、俺が止める間も無く目の前の女は左手をかざしファーティマへと向けた。

そして・・・・・。

ドサリッ、とまるで糸が切れた人形のようにファーティマが倒れた。

俺の瞳に焼きついたそれは、スローモーションで再生されリピートする。

ああ、ああああ、なんで、なんでもっと早く止めなかったんだ。

私が、私がもっと確りしていれば、そうもっともっと力があれば・・・・。

一瞬にして走馬灯の如く駆け巡るファーティマとの思い出。

始めてこの世界で彼女と出あったこと、搾乳したこと、楽しかったこと、苦しかったこと、時々幼体に戻って（性的な）悪戯したこと。

ああ、ファーティマ。ファーティマ、ファーティマ。

「イスファハーンさま！！」

目の前の男との腹の探りあいに痺れを切らした私は、自分の魔力を解放して最後の賭けに出る。

如何に目の前の男が未知の力を使うからといって、本気の私と部下に囲まれた状況ではどうすることも出来まい。

だからこそ、此処で相手が引いてくれることを願う。

こんな所で無駄な力を使いたくはないし、何よりも忌まわしい私の”あれ”が出る前に早く、早く！！

そんな時に聞こえてきたのがあの女の声だ。

突然の事態に、男が呆気に取られている事がわかる。無論私も同じだ。

だからこそ、無意識とはいえ気がついたら彼女に手を下した後だった。

咄嗟のこととはいえ、本能を押さえ切れなかった自分の不甲斐なさに唇を噛むが、だが、そんなことなど次の瞬間には吹き飛んだ。

そう、周囲と震わすほどの、圧倒的で無慈悲で、何処までも暗く、冷たい力の波動が私たちに浴びせかけられ、部下たちが呆気に取られている間に私は素早くその場から飛びのき、後れた部下たちが助ける暇も無く男から発せられる実体をもった波動に飲み込まれていった。

そして、天井のクリスタルの光が消え、私の目の前に巨大な影が現われた。

大蛇を思わせる胴長の巨躯に、胴体についていない浮遊している爪と腕、何者も写さぬ無機質な目と、逆立つ赤い鬣。

ああ、そうか。如何して私は恐怖していたのか。

相手が竜ではそのはずだ。まったく運がない。

私は、目の前に迫る竜が発する波動に飲み込まれながら、薄れ行く意識の中、そう考えていた・・・・・。

第十五話

広間に突如として出現した巨龍を中心に、膨大な魔力の奔流が渦巻き、周囲の壁や床を削り取っていく。

暫くして、魔力が収まり、龍の目からは一滴の涙が流れた。

―ファーティマが死んでしまった―

私の、短慮で彼女を死なせてしまった。私が、私がもっとよく考えていれば・・・私の愚かさゆえに大切な彼女が。

止め処となく流れる涙を流しながら、龍となったイスファハーンはファーティマの体に近づき、彼女の体を優しく腕で包み込む。

ふと、私は昔ファーティマが話してくれた伝説を思い出していた。

竜の体は強力な魔法の触媒となる為、多くの国で国宝として珍重され、その力は時としてあらゆる病や傷を癒し、死者を蘇らせるとも・・・。

試してみる価値はある。

私は、自らの瞳から流れる大粒の涙をファーティマに注ごうとし、
《お止めなさい。その人を生き返らせてはダメ》突然頭の中で鳴り響いた声に思わず顔を上げた。

「いったいだれです？私を止めるのは。彼女は私の過ちで死んだも同然なのです。それを生き返らせようとして何が悪い」

《その女性は自らの意思で此処に来ました。その結果がどうであれ、それが彼女の運命なのです》

「運命！？そんなモノの為に彼女が死んだというのですか。それでは、それでは今までの彼女の生はいったい何の意味があるんです！！」

《・・・私には、運命を語るすべはありません。でも、彼女は望んで自らの人生を貴方に奉げたのです》

《彼女は、ある偉大なる御方をこの世界に転生させる為に、自らの人生を全て注いできました》

「それがいったいなんだと言うのです！？彼女は、彼女は、ファーティマはこの世でただ一人、私の大切な人なのです。それを訳も分

からぬものの為に命を落としたなど・・・納得できません！！」

洞窟全体を振るわせる咆哮と共に、全身から再び膨大な魔力が迸り、それを天井に叩きつける。

轟音と共に、巨大な魔力の塊が当たった部分だけが、ゴッソリと抉れ、彼が如何に強大な力を得たのかを証明させた。

《愚かな、何故分からないのです。世界は、別の世界と繋がっているのです。死とは忌むべきことではありません、どんなものであれ死せるものの魂は世界を超え巡り、そして新たな生命を育む基となるのです。死せるものを復活させるということは、その流れを断ち切ることになり、恐ろしい事が起こるでしょう。死者から永遠の安息を奪ってはなりません、それがどんなに大切なヒトであろうとそれは決して何者も犯してはならない聖域なのです》

「それでも、それでも私は・・・・ファーティマと共に生きたい。例えそれがどんな結果になろうとも、彼女だけは決して失いたくはない」

全身からあふれ出した魔力は成りを潜め、顔を俯けるイスファハーン。

その姿を哀れと思ったのか、声の主は彼に一つの方法を教える。

《貴方の気持ちはよく分かりました。幸い、彼女の契約は偉大なるあの御方が転生されるその時までとなっています。彼女が契約の印として石と生命の水とを受け取りました。石はどんな場所であれあの御方を召喚し、生命の水は彼女の生命そのもの。その力を使えば永遠の命も、死せるものを再び生き返らせる事が出来るでしょう》

「生命の水ですね。分かりました、それで彼女が救われるならば」

《唯一つ忠告しておく。生命の水とて永遠ではない、蘇らせるのはほんの一滴だけで十分だ。ゆめゆめそれを忘れるな、過ぎた力はやがてその身に降りかかる不幸となるだろう》

そこで声は途切れ、洞窟の中は静寂に包まれる。

私は、ファーティマがいつも胸元に潜ませていた不思議な雫の形をしたものが、生命の水であると直感し、彼女の体を傷つけないようにそっと部屋まで運ぼうとして、ふと目の端に土を被った女の姿が映る。

その肌と髪の色に見覚えがあった私は、ワナワナと怒りに全身が震えるが、今はファーティマが先決と先を急ごうとしたが、チラリと目に映る女は、まだ見るからに弱弱しく息をしていて放って置けば何れ死ぬだろう。

だが、見つけてしまった手前、何もせず放っておくのは（たとえ彼女の仇とはいえ）死んでは目覚めが悪い。

ハア、とため息をついて女の体から土を払い、服の端に爪の先を引っ掛けて、彼女も一緒に運んだ。

第十六話（前書き）

久しぶりの投稿です。書いてみて遅々として進まない展開に作者も皆様もいい加減飽き飽きしてきた所でしょう。

最後にアンケートを設置いたしました。宜しければ感想のほうにお答え下さい。

第十六話

「う・・・ん？」

眩し・・・・・・くは無い、仄かな（太陽の刺す様な強い光とは違う）柔らかいクリスタルの光が私を照らす。

ずっと夢を見ていたようだ。

夢の中でイスファハーン様は泣いていた。

ずっと泣いて泣いて、今にも押し潰されそうな、そんな酷く儚く脆い姿だった。

私はイスファハーン様の腕に抱かれ、傍にいたのに声を出す事が出来ない。

何度も何度も声を出そうとしても、まるで自分の体がそうでないように全くピクリとも動かず。

何と無くだがこれが、「死」だと漠然としながらも悟った。

その内、私の存在もぼやけて来てずっと傍にいるイスファハーン様の顔さえも分からなくなった。

そこまでは覚えていたが、その後のことはよく分かってはいない。

だが、横になっている私の直傍で、恐らくずっと看病してくださったのだろうイスファハーン様が私の手を両手で包みながら眠ってい

た。

頬に涙の後を見つけた私は、感謝と共に暫くこのままでいたい様な気分になり、そのままイスファハーン様と共に再び眠りについた。

暗い・・・・・・・。

埃まみれ、とまでは言わないが明らかに倉庫として使われていたものに簡単な毛布と椅子を運び込んで一先ず人を入れる空間を作った。

と思わしき部屋の中で、私は両手両足をロープで拘束され呪文が詠唱できないよう猿轡も噛まされ現在床の上で転がっている。

どうやら私だけが生き残ったようだ。

部下達に何度か念話を送ったが、誰一人返ってこず重傷の為その余裕も無いと考えたがそれでも何も反応が無いのもおかしい。

殆ど本能的に全魔力を守りに使ってしまった為、体中の彼方此方が痛み魔力も空っぽで数日は回復しないだろう。

今の私は、ただの人間より少し丈夫なだけの存在。

進退窮まるとは正にこの事だ・・・・・結局、私にはもう何も出来ることは無いのか？

ギイイイ

扉が開く音がする。

空いた扉の隙間から外の光が漏れて、少しだけ部屋の中を明るくする。

私の目の前に男の下の思わしき靴が映る。

満足に動かせない首で目だけを上に向けると、矢張りそこにはあの男がいた。

「お前には色々と聞く事がある。正直に話してもらえるとは思っていない。だからこうする」

暗がりの中浮かんだ男の影から、真っ直ぐ手が伸びる。

何も抵抗する事が出来ない私は、ただ目の前に伸びる手の平を睨むしかなく、そして悔しさで猿轡をかまされている歯を食いしばった。

第十六話（後書き）

今後の展開は・・・・。

１もう少しこのまま、ダラダラと。
２竜の里まで飛ばす。
３嫁さんが来るまで飛ばす。
４いっそ主人公が神になるまで・・・・・・・。

第十七話

ギュンカー・ギュンスターはイラついていた。

部下との連絡がつかなくなったのが一つ。

折角与えた商会の精鋭が無為に失われた事が一つ。

相手の脅威を見や誤った自分自身に一つ。

そして何よりも今彼が手に取っている洋紙皮に書かれている内容が今一番彼を苛立たせていた。

内容は婉曲に書いているが商会内に他社のスパイが紛れ込んでいるとのこと。

そして商会のお得意様である竜の里、そこの長老たちが動き出したこと。

どちらにしろ元会長から今の商会を任されている手前、今回の失態はあまりに大きい。

最悪、蜥蜴の尻尾にされる可能性さえある。

そうなったらそうなったで考えがあるが、むざむざやられているばかりなのは彼の性に会わない。

チリーン

ギュンスターは黒光りするピカピカに磨かれた執務室の机の上にある鈴を鳴らした。

コンコン

直に部屋の扉をノックする音が聞こえギュンスターは不機嫌さを隠すでもなく乱暴に、

「入れ」

とだけ言う。

静かに扉を開け、部屋の中に入ってきた会長つきメイドに向かって彼は自分の指示を書き込んだ封筒を投げ渡し。

それを危なげなく受け取ったメイドが一礼して部屋を出て行く。

メイドが部屋を出て扉が閉まると、ギュンスターは苛立つ体を押さえようと背もたれにもたれかかる。

「さて、これでどうなるか」

一言呟くとギュンスターは沸き立った血を押さえる為に目を閉じ、暫く気を休めることにした。

竜の里

現在この世界に生き残った竜族の中で長老と呼ばれる複数の最も年老いた竜達が集まり、額をつき合わせるようにして話し合っていた。

「確認した魔力反応から恐らくは純血種以上の力を持つことは判明したがそれ以上はまだ分からん」

「だが、まさか我等に感知せぬ竜がいたとは。それも最低でも純血種クラスの竜となると、今一度この時代に再び我等竜族が覇権を握る時代がくるやもしれん」

「いや、竜と決め付けるのは早計ではないか？実際姿を確認したわけでもあるまいに」

「だが、この地上にあれ程の質量を誇るものなど我等竜以外に何が居る？逆に竜でなければいったいなんだと言うのだ」

集まった者達全員が里での実力者であり、通常は各々の種族同士での婚約や竜の血を維持する為に研究を重ねているが、今回の自体はその彼等をもってしても図りかねることであった。

「兎に角、誰か派遣することで異論はないな」

議長格の竜がそう言うが、言外にこれ以上の議論は不要という意味も含まれている。

結局里で一番力が強い竜の意見が最終的に可決されるのだからそれ以外の意見など単なる里での話し合いの結果というポーズにしか過ぎない。

「では一体誰を派遣します？無論巣作り中の雄竜や結婚を控えた雌竜ではいけません。しかし現在里にいる竜で件の相手と対抗できるのは・・・・・・・」

嘗ての力を失ったとはいえ、竜族はまだこの地上最強の力を誇っている。

だが、その彼等をもってしても件の相手では長老を除き今の若い竜達では到底相手など出来ない。

そもそも純血の竜種以上の力を持つ相手ではそれこそ古の始祖クラスでないとまず相手にならないほどだ。

ここにきて長老達には二つの道がある。

犠牲になると判っていて誰かを派遣するか、それとも最低限死なない為に長老の一人を出すか。

暫く竜の里はその事で荒れそうな雰囲気が流れ出していた。

外伝というなの謝罪

長らく更新を滞らせて申し訳ありません。

正直に白状します。

ネタが浮かびません。

色々と考えてはいるのですが駄目ですね。

プロットも何も無しで書いたもので今後の方向性が全く見えてきません。

いっその事キングクリムゾンして主人公を竜の里に強制転移させて嫁さんの構想を練っていたほうがいいような・・・。

いや、それよりも覚醒させて世界滅ぼすとか・・・。

少々気分転換がてらに外伝を上げました。

宜しければ見てやってください。では、又何時か何処かで・・・・・・。

突然だが竜に転生してしまった。

まあぶっちゃけ巣作りのドラゴンだが。

正直気乗りがしない。

だってねえ、竜の巣で目覚めたはいいが両親は毎日喧嘩してばっかで巣は崩壊寸前。

この世界のドラゴンの宿命なのかオスはメスよりも力で圧倒的に劣る。

だから毎回大怪我して負けるのは親父のほう。

喧嘩の度に巣の修復費用や親父の治療代等など、ついでに時々巻き込まれて生死の境を彷徨う事も何度か。

というか生後二ヶ月の赤子が右腕引きちぎれるってどうよ。

あの時は死ぬかと思ったが、親父は毎回内臓全部破裂と全身複雑骨折を起こしているので親父のほうが酷いのだが・・・。

そんなこんなで何とか成人して竜の里で嫁さん候補、つまりは許婚をもらったんだがこれが又。

酷いブスだ。

なんだあのナマッチロイ肌、それに大きな目にクリンとした睫。

挙句に枯れ木のように細い手足と、不釣合いなほど大きい二つの脂肪の塊。

腐ったオレンジの汁で染めたような金髪が余計俺を苛立たせる。

（貴方の好きな金髪巨乳二次元美少女を思い浮かべてください。主人公は美的感覚が常人の斜め上なだけです。決してブ〇専ではありません）

ああもうホントむかつく。

会っていきなり

『ふん、貧相な顔ね』

だと。

お前こそブスのクセに威張るんじゃねえ！！

くそこんなのが俺の許婚とか、ホント信じらんねえ。

もうこれはアレだな、巣作りを名目に大陸から逃げるしかない。

原作？

そんなもんしらん。

腹が減るのは我慢できるがあの女と一緒にいるのは死んでも御免だ。

こうして行き先なんて決めてない見切り発車で俺は竜の里を飛び出し、許婚から逃げる為に大陸から抜け出す術を探すのであった。

続かない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4760q/

巣作り...神龍!?

2011年10月30日18時03分発行